

## 近代中国人女性日本留学史研究の概況

(お茶の水女子大学大学院助手) 周 一川

### はじめに

清末から始まった中国人の日本留学については、様々な視点からの研究が進んでおり、その中の女子留学生についても、近年、徐々に研究が進展している。本稿は、中国人女性日本留学についての従来の研究成果をまとめ、それらを更に詳しく比較分析したうえで、その研究動向を論述することを目的とする。

女子留学生中の何人かは、帰国後革命運動や女権運動に活躍し、歴史に確たる名を残しているの、そのような人たちについての研究論文や伝記研究は少なくない。例えば、革命に命を捧げた秋瑾は清末の留学生であり、開明的な女性であると同時に、文学面でも優れていたため、彼女についての研究は、生活、家庭、詩文、革命活動、思想等の各方面で数え切れないほど多い。本稿の対象とする従来の研究成果は、中国人女子留学に対する総合的な研究を中心とし、個人を中心とする文献は省略する。

中国人女性の日本留学についての研究は次の三種類に分けることが可能である。即ち、留学史・女性史・調査報告と論文である。それぞれ当然のことながら、研究の出発点と重点の違いにより、論者の視角も違っている。

### 一. 留学史における女子留学の記録

中国人留学史には例外なく女子留学生のことが書かれているが、内容に乏しく、殆ど数頁の記述に留まるが、最近では留学史関係の著作も多くなり、研究が進むにつれて、女子留学の記録も増えてきた。

### (一) 舒新城著『近代中国留学史』

舒新城著『近代中国留学史』（上海中華書局、1927年）は、中国で最初の中国人留学史であり、最初に女子留学を記録した著作でもある。中国人研究者が書いた留学史は、日本のみならず、欧米をも含めた対外的な留学政策・実態を研究する著作が多かった。舒新城の『近代中国留学史』も全書を十五章に分けて、欧米留学と日本留学の開始、欧米留学の再興と日本留学の全盛、庚子賠償金留学と勤労留学、留学政策と留学問題等の内容をもつが、その中の第十章は「官紳遊歴、貴胄遊學、女子遊學」<sup>(1)</sup>であり、女子留学が官僚・貴族等の留学・見学という特別な枠に入れられている。

本書は、中国女性の日本留学初期の幾つかの重要な事実と清朝政府の女子留学政策の内容を明らかにし、次のように女子留学開始時の歴史的な環境を論じた。中国の伝統的な女子教育の観念は「従を以て正と為す」（以順為正）であり、戊戌（1898年）維新運動後に女子教育の重要性が見直されたが、「女学」（女子教育）を創立する根拠も「上は夫を相くべし、下は子を教うべし、近くは家に宜しかるべし、遠くは種を善くすべし」<sup>(2)</sup>とし、女子教育はまだ国家の教育体制に組み入れられていない時期であったという。そして、中国人女子留学生を受け入れた実践女学校と東西女学（東亜女学校の誤りと思われる）の学科目と、実践女学校に官費留学生が集中している実態等を簡単に紹介している。1910年に「学部」（文部省）は女子の日本留学についての規程を公布し、この規程は女子留学を制限すると同時に、男女平等の官費資格を女性にも与えたと、舒新城は指摘している。

本書の女子留学についての記述は、注を除けば数百字の記録にすぎないが、清末の女子留学の重要な事実を記録して、その後の研究にとって重要なポイントを提供した。

## (二) 実藤恵秀著『中国人日本留学史』と『中国人留学生史談』

中国人の日本留学に関する研究の第一人者である実藤恵秀は、幾つかの優れた成果をあげた。それらは中国人日本留学史の研究にとって不可欠な文献である。実藤恵秀の著作には、中国人の日本留学について、1896年から1937年に至るまでの留学の理由・実態・生活から、文化面に及ぶ貢献、革命運動への関与等が、幅広く論述されている。しかしながら、資料の制約によると思われるが、女子留学生についての論述は清末の時期に限られている。

『中国人日本留学史』（くろしお出版、1960年）第二章「日本留学のうつりかわり」に第十四節「女子留学生」がある。それは5頁程度の短い論述であるが、最初の中国人女子留学生の来日時期・人数・評価等と、実践女学校が官費留学生を受け入れた流れを明らかにしている。

女子留学生の社会活動については、「留学生取締規則」反対運動に参加した女子留学生の動きと帰国派のリーダーになった秋瑾のことを詳しく論述し、女子留学生が1907年に創立した「留日女学生会」という組織と、秋瑾の『中国女報』という雑誌等についても論じている。

清末の女子留学の意義については、中国人女子留学による新思想の宣伝と中国女子教育制度の成立に対する役割とを取り上げている。「中国の女子留学生は、数において男子の百分の一であったが、その活動はすこぶる目立った。彼女らは雑誌によって、さかんに新思想を鼓吹した」<sup>(4)</sup>。女子の日本留学は、中国の女子教育が正式に認められた『女子師範学堂章程』と『女子小学章程』の公布より遙かに早かったが、「留日女子学生が、こ

れを促進するちからとなったことは想像に難くないことである」<sup>(5)</sup>と論じている。

『中国人留学生史談』（第一書房、1981年）では、第七談「多数速成の時代」の「留学生教育学校」に女子留学生の内容が補充されている。実践女学校のことだけでなく、成女学校の中国人女子留学生について一枚の写真から説き起こし、『成女二十五年』、『成女六十年』の資料を利用してその実態をまとめている。それによると、成女学校が中国人女子留学生を受け入れたきっかけは、「明治39年12月 新築校舍落成と同時に支那留学生会館から同国女子学生の教育を委託され速成師範科を特設、翌40年12月、12名の卒業生を出す」<sup>(6)</sup>ということであったことが判明した。

## (三) 巖安生著『日本留学精神史』

『日本留学精神史』（岩波書店、1991年）は文学的な手法で留学と関係ある多量の文献を利用して書かれた中国人の留学精神史である。精神史を考察する著作なので、事実の論述は少ないが、特殊な視角から留学の環境、各種の現象、それらについての中国人の判断、心の揺れ、矛盾、社会への影響等を分析している。その中に、女子留学に関する第二章の「林黛玉まで甦らせる女子留学」の一節がある。この節は、留学関係者が書いたかと思われる『新石頭記』という小説を分析して女子留学のことに言及しているが、没落する封建的な名家の青年男女の悲劇を描写する古典の『紅樓夢』のヒロイン、ヒーローたちまで呼び起こして日本留学に行かせるもの」<sup>(7)</sup>と述べている。『新石頭記』の林黛玉は、『紅樓夢』の可憐で愛情至上の林黛玉と全く正反対であり、学問一筋であった。著者はこの小説を分析し、「当時に現れたもう一本の、細いながら熱い流れ——女子留学生の世界を反映しようとしたものに思われる」<sup>(8)</sup>と評価している。

女子留学の論述でも、著者は女子留学生たちの文章を引用し、彼女たちの思想の変化を中心とし

て分析した。女子留学生の文章には「女子、才無きは是れ徳なり」への批判、「軽便な旅装を整えて、幽深密閉の閨房を出て、快樂の汽船に乗って、自由な空気を吸おう」<sup>(8)</sup>という留学の心情、「女性の文化は花開く」<sup>(9)</sup>の憧れ等の内容があるが、それらは本書で高く評価されている。

#### (四) 黄福慶著『清末留日学生』

黄福慶の『清末留日学生』(台北中央研究院近代史研究専刊三四, 1975年)は、日中両国の資料を利用し、詳細に清末留学生のことを論述した書物である。女子留学について、黄福慶は日中両国の政治状況から論ずるが、本論の前に、張之洞と梁啓超の女子教育についての異なった見解を紹介する。さらに中国の女子教育はまだ正式に学制に入っていなかったが、女学校がかなり存在したことと、中国人女子留学生の教育に対する下田歌子の積極的な態度から日本の状況を分析したうえで、「女子教育は国内外の人々に提唱され、普遍的に重視された。女子留学はこのような機運の中に実現した。」<sup>(10)</sup>という結論を下している。

中国近代学生運動の開始とも言える「拒俄(抗露)運動」は、1903年のことであった。当時の女子留学生は10余名しかいなかったが、ほぼ全員がこの運動に参加したことについて本書は詳しく論じ、1903年に創立された最初の女子留学生組織「共愛会」のことも初めて取り上げている<sup>(11)</sup>。さらに留学生「取締規則」反対運動中の女子留学生についても「男子に負けない」<sup>(12)</sup>と評価した。

1910年の学部が公布した女子日本留学の規程については、「留日女学生とこれから日本へ留学しようとする女学生に種々な制限を加えることに他ならず、女子留学の気風が始まった時期に、この制限に遭遇するとは誠に遺憾な事であった」<sup>(13)</sup>と結論づけている。

#### (五) その他の留学史

前述の著作以外の留学史は、それぞれ次のような特徴を持っている。

小島淑男の『留日学生の辛亥革命』(青木書店, 1989年)は、大量の新聞、雑誌、外務省記録等の資料を使用し、辛亥革命期を中心として中国人留学生の実態を明らかにしている。その研究により、「留日女学会」の結成過程と目的等はかなり明らかになり、女子留学生の帰国動向も見えるようになった。

林子勳著『中国留学教育史』(台湾, 華岡出版有限公司, 1976年)は、中国側の資料を集めた資料大全のような著作であり、1847年から1975年の中国人海外留学史資料を整理しながら順を追って論じている。李喜所著『近代中国的留学生』(人民出版社, 1987年)は祖国シリーズの一冊であり、中国側の新聞、雑誌、回想録などの資料を利用し、近代における中国人の海外留学を解りやすく、全面的に紹介したものである。王奇生著『中国留学生的歴史軌跡』と『留学与救国』は、民国中・後期の、特に「満洲国」の特異な留学生の状況を論述した。以上の著作は留学史研究上の突破口となったものであるが、いずれも女子留学生については清末に集中している。

孫石月著『中国近代女子留学史』は、1949年までの女子留学の流れと、欧米・日本・ソ連などへの女子留学生のことを幅広く論述したものである。日本留学について、清末部分は第五章「清末女子留日」に述べられているが、殆どそれまでの清末の中国人女子留学生についての研究成果をまとめたものである。

民国期の部分では、アメリカ留学、フランス留学、そしてソ連留学はそれぞれ章立てされて論じられているが、日本留学については単独の章がなく、「近代女子留学政策」等の章にすこし触れられている程度で、資料の乏しいことを強く感じさせる。

## 二. 女性史における女子日本留学の位置

中国女性史は、生活史、運動史、教育史に分か

れる。以下、典型的な著作だけを分析する。

陳東原の『中国婦女生活史』（上海商務印書館，1929年）は、数千年の中国婦女の生活を中心として論述した著作であるが、中国人女性の留学について記録するのは第九章「維新時代的婦女生活」の1頁だけであり、日本留学の記録は「日本留学の女子は、江蘇・浙江が日本に近いので、戊戌変法以後恐らく留学した者の数は多数であった。実際の革命運動に従事した女子はこれら留学生が多かった」<sup>(94)</sup>という一言だけである。ほかの節で秋瑾と唐群英のことにも少し触れている。

清末の女子留学生は辛亥革命に参加した者が多かったので、談社英著『中国婦女運動通史』（上海中華書局，1936年）や中華全国婦女聯合会の『中国婦女運動史』（春秋出版社，1989年）の中に、又、小野和子著『中国女性史』（平凡社，1975年）にも彼女たちが創った組織・雑誌と革命運動がかなり記録されている。日本留学の女学生たちは中国の転換期であった辛亥革命前後に様々な革命活動に参加し、女権運動の主力軍となり、女性運動史にとっては非常に重要な存在であったのである。

『中国婦女運動通史』の第四節は「留日女學界之一瞥」である。この節には1907年に東京で創立された「留日女学生会」のことが詳しく記録されている。女子留学生たちが創刊した『中国新女界雑誌』、『天義報』、『二十世紀之中国女子月刊』、『留日女学会雑誌』のことも取り上げられているが、特に、『中国新女界雑誌』について「その質的な面は、女学報・中国女報・神州女報等と同じ価値を持つ」<sup>(95)</sup>と高く評価した。

小野和子は『中国女性史』に辛亥革命前後の女子留学生たちの在日状況と帰国後の革命活動を論述し、特に辛亥革命期の林宗素、唐群英などの女権運動のことを詳しく述べている<sup>(96)</sup>。

程謫凡著『中国現代女子教育史』（上海中華書局，1936年）には留学教育は含まれていないが、

最近に出版された雷良波等著『中国女子教育史』（武漢出版社，1993年）中の、第九章「戊戌維新到辛亥革命的女子教育」に留学教育が論じられている。同書は中国各時期の教育思想の分析と実態の論述を中心としているが、第九章には「女子留学教育之興」と「秋瑾及其女子教育思想」の二節があり、女子留学の最初期しか論じられてはいないものの、清末の代表的な女子留学生である秋瑾の教育思想を取り上げ論じているのが特徴である。劉巨才の『中国近代婦女運動史』（中国婦女出版社，1989年）は、アヘン戦争（1860年）から「五・四」運動（1919年）までの時期の女性運動史である。同書は、第四章の第四節「女子留学教育」と、第五節「女性知識人階級の出現」（知識婦女群的出現）で多量の中国側の資料を使って、日本留学と留日女子学生を中心に論述している。「女子留学教育」では、清末の女子留学生の中で、日本留学生が欧米留学生より遙かに多いことを指摘し、その理由として、日中両国の女子教育水準の差がさほど大きくないこと、距離が近いこと、学費が安いことという三点をあげている<sup>(97)</sup>。女子日本留学の実態については、女子留学生たちの組織、雑誌、革命運動という社会活動を中心に述べ、清末の女子留学運動の意義が民主革命と婦女解放運動にあると位置付けている<sup>(98)</sup>。第五節「女性知識人階級の出現」では女性知識人階級の構成が、留学生、教会系の女学生、中国私立学校・官立学校の女学生の三部分であると指摘している。そして、彼女たちの得意な専攻、職業及び分布地域を述べたうえで、それらの中で留日学生が最も活躍したと特に強調している<sup>(99)</sup>。

中国女性史は、留学史とは角度が違うので、日本に留学した女学生が女性世界へ与えた影響を重視し、特に女性運動史は留学生たちの社会活動に重点を置いている。各種の女性史は、女子の日本留学の意義について、辛亥革命への貢献と女権運動の推進を中心として論じているが、日本留学の

(32)

女学生たちは同盟会の会員が多く、彼女たちは辛亥革命に参加し、その後の女権運動のリーダーになった者も少なくなかったので、女子留学が中国社会の進歩と女性の地位向上に果たした役割が重視された。それらの殆どは個人例を挙げて論述していることが特徴である。

### 三. 中国人女子日本留学に関する調査報告と論文

中国近代における留学状況と女性問題の研究が始まった時から、その中に女子留学も含まれていたが、上述のように記録が極めて少なく、留学と女性問題の関連性への言及も乏しい。

70年代に入ると中国人女子留学生についての具体的な研究は日本で始まり、それは校史の編纂とも関係があった。1971年に中塚明は「奈良女子高等師範学校の中国人・朝鮮人留学生」(『アジア女性交流史研究』九)という論文を発表した。それは『奈良女子大学六十年史』の一部であった。この論文は中国人留学生の山東出兵反対運動の史料を中心としているが、中国人女子留学生の特設予科・本科卒業生人数を明らかにした。

1980年に台湾政治大学歴史研究所の王惠姫は、修士論文「清末民初的女子留学教育」(台湾、政大史研所修士論文)を提出した。この論文は日本留学だけではなく、欧米留学も含めて、清末から1919年まで中国人女性の海外留学を総合的に探索したものである。同論文は大量の資料を収集し、台湾にある民国初期の教育部の記録等、貴重な資料を利用して、女子留学生の名簿、帰国後の行方、留学教育の年表等の表が作られているが、中国側の資料だけを利用しているため、実態の部分は資料不足を感じる。

同論文は、女子留学の環境、実態、影響をそれぞれ分けて論じ、最初の総合的な中国女子留学についての研究であり、優れた成果をあげている。また、同論文は1919年までの女子留学生の名簿、

人数等を明らかにすることを企図し、多量の史料を調べてまとめたが、中国側の公的な史料に準拠しているため、留学の実態を全て網羅することは不可能であった。特に、当時政府の許可がなくても簡単に来日できた留日女学生たちについては、記述の不備を認めない。例えば、同論文の「清末民初留日女学生姓名表」には1919年まで292名の女子学生の名が挙げられている<sup>84</sup>が、実際の人数よりかなり少ない。

石井洋子は1983年に「中国女子留学生名簿——1901～1919年——」(『辛亥革命研究』二)を発表した。それは最初の中国人女子留学生を受け入れた学校の史料を中心として作った名簿であり、実践女学校の卒業生名簿と女子美術学校、日本女子大学校、東京女医学校、東京女子高等師範学校の名簿を1919年までまとめたものである。同名簿は、各学校の在籍簿等の資料を利用して作成しているため、中国人女子留学生研究における信用度の高い重要な参考文献である。

同年に石井洋子は「辛亥革命期の留日女子学生」(『史論』三六)という論文を発表し、清末の女子留学生を受け入れた学校と彼女たちの組織、出版物、活動を詳細に論述し、清末の女子留学生の実態を総合的に論じた。

この論文には実践女学校を中心として、東亜女学校、成女学校のことも論じられていた。実践女学校の清国留学生部の設立、学科課程のことと、中国人女子留学生の来校、最初の卒業生、官費生、留学生の学校生活、特徴等のそれぞれの面が述べられ、1920年までに実践女学校に200余名の中国人女子留学生が入学し、その内の98名(延べ人数)が卒業した<sup>85</sup>ことを明らかにした。さらに、同論文には女子美術学校、日本女子大学校、東京女子高等師範学校、東京女医学校の「学校別入学数」と「学校別卒業生数」という統計表があり、この時期の四校の中国人女子留学生人数を明確にした。

さらに、中国人女子留学生の組織と雑誌についても同論文にまとめられている。清末に女子留学生が結成した組織は「日本留学女学生共愛会」(1903年)、「中国留日女学生会」(1906年)、「女子復権会」(1907年)、「留日女学会」(1911年)の4つであり、雑誌は『女学報』(1903年)、『女子魂』(1904年)、『白話報』(1904年)、『中国新女界雑誌』(1907年)、『天義』(1904年)、『二十世紀之中国女子』(1907年)、『留日女学会雑誌』(1911年)の7種であった<sup>24</sup>が、石井洋子の論文は清末中国人女子留学生について多量の事実を明らかにし、適切にまとめた論文と言えるだろう。

上沼八郎の「下田歌子と中国女子留学生」(『実践紀要』二五, 1983年)は、実践女学校を中心として豊富な資料を利用し、日中両国の関係の中で実践女学校の創始者下田歌子と中国人女子留学生たちを位置づけようとした論文である。

同論文は、考察を実践女学校の留学生部に限定し、全体を三期に分け、日中両国関係の歴史的環境の中で論じた。「まず第一期(1859～1903)は、帝国婦人協会の発足と、中国人留学生の渡日に始まる日中交流の上昇期にあたる九年間で、清国女子部開設の時期にあたる。第二期(1904～08)は、留学生受容の全盛期にあたり、辛亥革命前夜の動向を背景として中国留学生部の整備する五カ年間である。第三期(1909～15)は、革命を契機として日本政府の対中政策が変わり、急速に留学生が帰国しはじめる下降期の7年間であり、資料的にも貧しくなる時期である。この第三期の末期の1914年に第一次世界大戦が勃発、ついで対支二十一カ条々約によって、両国の蜜月は事実上終焉を告げていく」<sup>25</sup>。同論文は中国側の資料と当時留学生部の「分教場日誌」等の資料を利用し、秋瑾をはじめ留学生たちの留学生活等と実践女学校の中国人女子留学生受け入れの流れを詳細に論述した。実践女学校の中国人女子留学生研究の不可欠な参考文献である。

1985年に加藤直子は「調査研究 東京女子高等師範学校と中国人女子留学生」(『お茶の水女子大学女性文化資料館報』六)という文章を発表し、その後に「戦前における中国人留日女子学生について」(『史論』四〇, 1987年)という論文を発表した。それらにより、1937年までの東京女子高等師範学校中国人女子留学生のことが明らかにされた。東京女子高等師範学校が中国人女子留学生を受け入れたのは1909年のことであり、清国の崩壊直前であった。加藤直子はまず中国人の日本留学全体の変化と東京女子高等師範学校の関係から着手した。「東京女高師に初めての清国留学生が入学したのは、日本留学の量から質への転換が図られる中で五校特約が成立し、女子留学生にも同様の動きが及ぼうとする時期であった」<sup>26</sup>。1909年に「2名の東京女高師入学が契機となって、中国側から女子官費留学の官立3校指定が行なわれるようになったのか、ただ単純に男子の官立5校に匹敵する3校が指定されたのかは定かではないが、ともあれ、東京女高師の初の中国人留学生は、こうした中国の女子留学の転換期に現れたことを、まず指摘しておかねばならない」<sup>27</sup>と、中国人留学生の東京女高師入学を評価した。また、1910年の「学部」の女子日本留学規程について次のように論述した。「今回の条件により女子の留学は実質的に制限され、人数も限られたものとならざるを得なかった。しかしながら、この通達は一面において、女子学生に官費の支給における男子と同等の権利を正式に与えるものであったことに注目すべきである。女子留学生にとって東京女高師、奈良女高師、蚕業講習所女子部の官立3校に合格することは、[五校特約]のあった男子よりも困難であったかもしれないが、入学し得た者は男子と同等に待遇されたわけで、これは当時の日本の状況とは異なった一面であった」<sup>28</sup>。加藤直子は女子留学制限の一面を取り上げながら、官立3校に合格すれば男子留学生と同等に官費生に

なれることを評価したのである。

1988年に三崎裕子の「東京女医校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」(『辛亥革命研究』八)が発表された。この名簿には卒業後の進路を調査した欄があり、帰国後の卒業生の追跡研究に関する貴重な資料である。残念ながら同論文には「満洲国」の留学生名簿は載っているが、台湾の留学生を含めていない。しかし、これによって、同校の中国人女子留学生の人数、在学期間、卒業率等がほぼ明らかになった。

90年代に入る前後に中国人女性日本留学史研究の主流は中国に移った。拙稿「清末留日学生中的女性」(中国社会科学院『歴史研究』1989年、第六期)と「下田歌子与清末女性教育」(中国北京大学日本研究中心『日本学』四、1995年)、謝長法の「清末的留日女学生」(中国社会科学院『近代史研究』1995年、第二期)と「清末的留日女学生及其活動与影響」(台湾『近代中国婦女史研究』第四期、1996年)、施宣圓「留日女学生与中国近代婦女解放運動」(日本、中国社会科学研究会『東瀛求索』第八号、1996年)等の論文が発表されたが、中国側資料の制限もあり、いずれも清末に集中している<sup>87)</sup>。

謝長法は「清末的留日女学生及其活動与影響」の論文で女学生たちの活動と影響を大きく3つに分けて論じた。第一、清末の思想・観念の更新と社会風俗の変化を促進した。第二、伝統的な教育の解体と崩壊を速め、清末女学の勃興と女子師範教育制度の創立を促進した。第三、留日女学生は日本で新式の教育を受け、新思想の影響の下で、彼女たちは愛国救国運動から清政府打倒の革命の道歩んだ<sup>88)</sup>と述べ、つまり中国社会へ新思想の伝播、女子教育制度の設立、革命運動の三側面の影響を論じた。さらに、同論文には中国側の史料を利用して作った「清末留日女子学生統計表」が載せられた。それは日本全国の30余校に留学した女子学生の名簿であり、東京以外の女子留学生

の分布もかなり判明したが、しかし、全部中国側の資料で作った統計表なので、東京の学校については日本人研究者の成果を参考にしていないため、全部網羅されていない。しかも、同一人物について中国側の資料を利用して作った謝長法の統計表と、学校の在籍簿により作った日本人研究者の統計表の記録が異なる処もあり、再検討の必要がある。

同論文で女子留学生の組織として新たに二つが補充された。それは「赤十字社」(1903年)と秋瑾等の「十人会」である<sup>89)</sup>。「赤十字社」というのは1903年の拒俄運動の時だけではなく、1911年の辛亥革命の時にも救護のため、女子留学生たちによって結成されたが、「赤十字社」と緊急時期ではない時に結成された前述の4つの組織を、1つに論ずることが適当かどうか疑問がある。「十人会」には女子留学生は参加したが、同会は女子留学生の組織ではなかった。

以上、女子留学に関する先行研究をまとめると、日中両国の研究重点及び出発点の違いがはっきりとわかる。中国の研究が清末に集中し、社会的な影響等のマクロ的な意義に目をつけているのに対して、日本のそれは具体的な調査から着手し、厳密な研究を進めていると言えよう。

#### 四. 中国人日本留学史研究の近年の動向

ここ十数年来の日中両間における教育文化交流の進展に伴い、日本留学研究の方法と対象をめぐる様々な見識と見解が各方面から提示されてきた。

1977年から文部省の科学研究費による特定研究「文化摩擦」が始まり、その研究により、留学問題に関する研究は、急速に進展した。国立教育研究所アジア教育研究室を中心とした研究者グループは、阿部洋を中心に構成され、日本とアジア諸国との「教育文化交流の失敗と挫折の体験を全面的に再検討し、……失敗、挫折の経緯や、その構

造的要因を徹底的に把握する」ことを研究課題に設定した<sup>99</sup>。その中に、中国人日本留学に関する成果はかなり多く、阿部洋編『日中関係と文化摩擦』（巖南堂、1982年）等の専門書、阿部洋「戦前日本の〔対支文化事業〕と中国人留学生——学費補給問題を中心に——」（『国立教育研究所紀要』第121集、1992年）等の研究論文、小林文男編者『中国人日本留学史の研究——戦前期・留日学生の記録——』（1994年）という研究成果報告書が相次いで発表されている。なお、お茶の水女子大学中国文学科は藤山和子を中心に「中国近現代文学における女子日本留学生の実態とその果たした意義に関する総合的研究」を行ない、平成三年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書を刊行している。この報告書は、目録であり、二部から成っている。第一部が「お茶の水女子大学中国文学研究室所蔵留学生雑誌目録」であり、第二部が、第一部の雑誌のうち、「近代中国期刊目録彙編」に未収録の雑誌の記事目録である。

研究の方法論としては、インタビュー調査ないし「口述史」の方法を取り入れていることも注目される。例えば、加藤直子の「戦前における中国人留日女子学生について——女子学生の事例を中心として——」（『史論』四〇集、1987年）という論文は、元留学生へのインタビュー資料を中心に中国人女子の日本留学の歴史を探索したものである。前述の小林文男編著『中国人日本留学史の研究——戦前期・留日学生の記録——』という研究成果報告書は、中国の現地調査によって得た10名の元留学生の面接・インタビューの記録であり、従来の研究の欠点を補うものと言える。鐘少華編『早年留日者談日本』（中国山東画報社、1996年）という本は、編者が14名の元日本留学生のインタビューに基づいて整理してできた本である。中国人の日本留学に関しては多くの面にかかわっているため、中国人日本留学史の研究に対して重要な参考書と思われる。

前述のように、中国人女性の日本留学については、日中両国の研究者は、研究上の交流が少なく、お互いに研究成果の利用は少なく、その研究の推進が平行状態であった。このような研究状態を変えるために、筆者は、1994年から1998年までの四年間を利用して、「中国人女性の日本留学史研究——民国初期を中心に——」という博士論文を完成した。本論文は、日本と中国両国の研究成果をまとめ、両国の重要な政府資料と民間資料を照合したうえに、インタビューの調査も活用して、民国初期における中国人女性の日本留学の実態を明らかにすることに力点を置き、中国社会に与えた影響を考察することを目的とするものである（国書刊行会より2000年初めに出版予定）。筆者が発表したこの課題と関連がある論文を以下に記す。

- 一．「大正時代の中国人女子留学生——費達生」（日本語）『お茶の水女子大学女性文化研究センター年報』九・十合併号、1996年。
- 二．「清末・民国初年における日本留学中国人女子学生像の変遷」（日本語）『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第十九号、1996年。
- 三．「外務省記録から見る大正期中国人女子留学生」（日本語）『日本大学史紀要』第二号、1996年。
- 四．「清末民初中国女性的日本留学」（中国語）在日中国留学生学友会『中国人留日百周年記念文集』1996年。
- 五．「中国人女子留学生を受け入れた官立三校について」（日本語）日本慶応義塾大学三田史学会『史学』六七巻、一号、1997年。
- 六．「中国人女子留学生を受け入れた私立3校について」（日本語）日本慶応義塾大学三田史学会『史学』六八巻、三・四号、1998年。
- 七．「日中戦争時期の留日学生——概況と事例研究——」（日本語）お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化論叢』、1998年。
- 八．「『満洲国』の留学政策と留日学生」アジア教



(36)

育史研究会『アジア教育史研究』第八号，1998年。

以上の論文リストから分かるように、民国初期と民国後期（抗日戦争時期）における中国人女性の日本留学についての研究は進展が見られているが、1927年から1937年までの国民党統治の民国中期については、まだ、空白状態である。筆者は、それを今後の課題とする。

### おわりに

中国女性の日本留学は、男子の日本留学とほぼ同じ時期に始まった。しかしながら、男子に比べると、その人数は少なく、時期により変動はあるが、清末には男子の約百分の一、中華民国期においても約十分の一しかなかった。それは、何千年来続いた中国封建社会の「男尊女卑」の伝統観念が様々な形で根強く中国人の意識に存在していたことが、最も主要な原因と思われる。中国人女子留学生の人数は総体的に少なく、中国人の日本留学の大きな流れにおいては細く小さな流れではあったが、その意義は決して人数と比例しない。女子の日本留学は、中国人の女性観の改変、近代学制における女子教育体制形成と発展、近代女性知識人の誕生と活躍等に大きな影響を与えたのである。

清末の女子日本留学については、そのことが画期的な意義を有していたので、これまで多くの研究成果が発表されているが、民国期の女子日本留学については、政治状況その他の種々の原因により相対的に研究成果が少ない。この時期における中国人女性の日本留学は、勿論、日中文化交流の重要な一側面であり、清末のそれ同様、様々の面で中国社会へ影響を与えた。民国期の女子留学については今後さらに研究を深め、その歴史的な位置づけをしなければならない。

### [注]

(1) 舒新城著『近代中国留学史』上海，上海中

華書局，1927年，119頁。

- (2) 「上可相夫，下可教子，近可宜家，遠可善種」。舒新城著『近代中国留学史』129頁。
- (3) 実藤恵秀著『中国人日本留学史』東京，くろしお出版，1960年，79頁。
- (4) 実藤恵秀著『中国人日本留学史』79頁。
- (5) 実藤恵秀著『中国人日本留学生史談』東京第一書房，1981年，205頁。
- (6) 巖安生著『日本留学精神史』東京，岩波書店，1991年，70頁。
- (7) 巖安生著『日本留学精神史』71頁。
- (8) 「束輕便之行装，出幽密之閨房，乘快樂之汽船，吸自由之空氣。」巖安生著『日本留学精神史』75頁。
- (9) 巖安生著『日本留学精神史』76頁。
- (10) 「女學在中外人士的提倡下，已普遍受到重視，而女子留學，亦在這種機運下出現」。黄福慶著『清末留日学生』台北中央研究院研究專刊三四，1975年，58頁。
- (11) 黄福慶著『清末留日学生』58頁。
- (12) 「實不讓鬚眉」。黄福慶著『清末留日学生』296頁。
- (13) 「無非是給留日女學生與欲赴日本留學的女學生，加以種種限制，正在開女子留學風氣之時，遭此限制，誠為一大憾事。」黄福慶著『清末留日学生』62頁。
- (14) 「至於到日本去的女子，因為離江浙近的原故，戊戌變法以後大概去的很不少。從事實際革命的女子，以此類女生為多」。陳東原著『中国婦女生活史』上海，上海商務印書館，1928年，352頁。
- (15) 「惟其質的方面，則頗與女學報，中国女報，及神州女報等，有同樣之價值也」。談社英著『中国婦女運動通史』上海，上海中華書局，1936年，15頁。
- (16) 小野和子著『中国女性史』東京，平凡社，1975年，111～115頁。

- (17) 劉巨才著『中国近代婦女運動史』，北京，中国婦女出版社，1989年，239頁。
- (18) 劉巨才著『中国近代婦女運動史』247頁。
- (19) 劉巨才著『中国近代婦女運動史』249頁。
- (20) 王惠姬「清末民初的女子留学教育」政大史研所修士論文，台北，1980年，265頁～302頁。
- (21) 石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」東京女子大学読書会『史論』三六，東京，1983年，36頁～37頁。
- (22) 石井洋子「辛亥革命期の留日女子学生」41頁，47頁。
- (23) 上沼八郎「下田歌子と中国女子留学生」実践女子大学『実践紀要』二五，東京，1983年，61頁～89頁。
- (24) 加藤直子「調査研究 東京女子高等師範学校と中国人女子留学生」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』六，東京，1985年，66頁。
- (25) 加藤直子「調査研究 東京女子高等師範学校と中国人女子留学生」66頁。
- (26) 加藤直子「調査研究 東京女子高等師範学校と中国人女子留学生」65頁。
- (27) なお，江藤恭二，肖朗，王鳴「日本における清国女子留学生に関する一考察——近代の日中文化・教育交流史研究——」（『名古屋大学教育学部紀要』第38巻，名古屋，1991年，313頁～322頁）の内容は，拙論「清末留日学生中的女性」の日本語訳を基にしたものである。
- (28) 「第一，促進了晚清思想觀念的更新和社会風俗的改變。第二，加速了傳統教育的解體和崩潰，促進了晚清女學的勃興和女子師範教育制度的創立。第三，留日女生在日本接受了新式教育，在新思想的影響下，她們由參加愛國救亡運動走上了反清革命的道路」。謝長法「清末的留日女学生及其活動与影響」中央研究院近代史研究所『近代中国婦女史研究』第四期，台北，1996年，72頁～79頁。
- (29) 謝長法「清末的留日女学生及其活動与影響」72頁。
- (30) 蔭山雅博「研究動向 東洋教育史／中国」『教育史学会40周年記念誌』東京，1997年，11頁。

